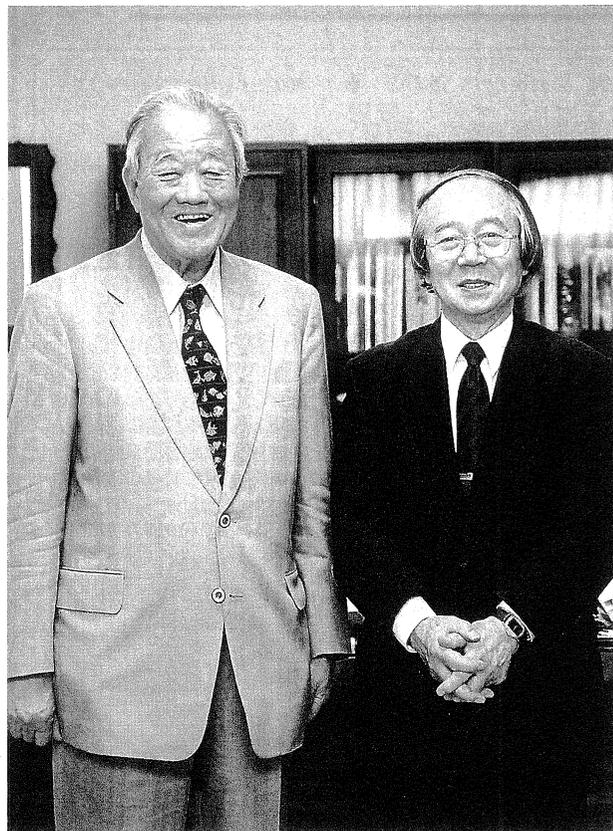


モーツァルトは宇宙のよう に 広くて深い世界



モーツァルト生誕二五〇年

河合 今年はモーツァルト・イヤール、生誕二五〇年で、世界的なモーツァルト・ブームですが、先生はモーツァルトの研究者としてどんなお考えですか。

海老澤 ちよつと騒ぎ過ぎですね。私が意識しているモーツァルトの祝年というのは、生誕二〇〇年、一九五六年（昭和三一年）が最初です。

一〇〇年単位の誕生祝いを祝われる人は音楽家でもけっこう多いんですけど、五〇年単位というのはそんなに多くない。河合 そうでしょうか。

海老澤 そういう点では、バッハも、ベートーベンもかなわない。モーツァルトはやっぱ非常に聴きやすい。親しみが

あるということ、これだけ普及し、さかんになったと思うんです。

ところが、私にとっては、今年はまだ愉快な、楽しい年ではございません。それは、六〇年もモーツァルトを対象として研究してますと、私にとってはモーツァルトというのは、それこそ宇宙のようによく深く広い世界で、いくらやってもとてもかなわないという思いがあります。ところが、最近はそのモーツァルトが、商品化されビジネスの対象になつていいる。河合 そうですねえ。しかも、あまりにも直接的というかね。

海老澤 特にテレビでは「丸ごとモーツァルト」とか、「すべて見せますモーツァルト」とか（笑）、私にはちよつと考えられません。五〇年やっても、一〇〇年やっても、モーツァルトは究めたい存在なのに、今あまりにも安易になりすぎです。

それから、これは長官のご専門にもかかりませんが、音楽療法があります。河合 そうそう。

海老澤 モーツァルトのレクテル、商品化によって、モーツァルトを聴けば、神

経痛でも、頭痛でも、胃痛でも、効くと。皆さんがそういう意味で関心をもつて、ひとつCDを買ってみるかということになる。買われることを一概にいかんとは言えません。ただ、今流行しているモーツァルト療法、あるいはモーツァルト・イフェクトといいますが、例えばある曲の一楽章を聴けば、高周波が栄養みたいにふんだんに含まれているので効くというのはいかにもモーツァルトを利用したものじゃないかと思えます。

三楽章の作品でしたら三楽章全部聴いて楽しむ。それで心をなごませる。そうすると、場合によっては痛みも消えるかもしれません。河合 そうですね。

海老澤 何が憂鬱かという点、私にとつて憂鬱というよりも、モーツァルトさんにとつて気の毒だという感じがしています。

河合 ほんとに同感です。そんな右から左に効果があったりするようなものでは



えびさわ・びん 東京都出身。昭和41年国立音楽大学教授、54年～平成3年学長。のち理事長、学園長を兼務し、11年理事長退任。同年新国立劇場副理事長就任。モーツァルト研究の第一人者として知られ、平成元年東洋人として初めてオーストリアのモーツァルト中央研修所員となる。11年ポーランド王立音楽アカデミー名誉会員。著書『モーツァルト研究ノート』（音楽之友社、1973）、「瀧廉太郎」（岩波書店、2004）、共編訳書『モーツァルト書簡全集』（白水社、1976～2001）など多数。昭和59年フランス学術功労勲章、平成3年ザルツブルク州黄金勲章、オーストリア共和国有功勲章、8年紫綬褒章、フランス政府芸術文化勲章オフィシエ受章。

モーツァルトの魅力

ないですね。

河合 先生自身にとつて、モーツァルトの魅力は何ですか。

海老澤 私たちが心してモーツァルトを聴こうという気持ちをもって聴けば、モーツァルトは我々のどんな心の状態にもこたえてくれる曲を、八〇〇曲ぐらいつくついているというのは、奇跡的だと思います。

私は皆さんとちよつと異なつた道をたどつてきました。つまりモーツァルトの作品、あるいは生涯を研究するという立場です。モーツァルトの作品にはどの曲にも——言葉で語らないけれど、彼が一つひとつの作品に、「これを表現したい」というものがあつて、それを私たちに音で聴かせてくれる。その音をどういふふうに解釈するかというのは、私たちに与えられた自由、あるいは演奏家に与えられた自由です。演奏家、聴き手が、そういう魅力をもつた響きがどこに由来するかということ、私の場合には研究者と



してアプローチを試みてるんですけど、なかなかそれがうまくいかななくて挫折します。でも、その挫折がまたモーツァルトの魅力なんで、それでもうやめたという思いにはならない。

河合 おっしゃるとおりで、ずうつと近づいていったけど、まだ近づけないところ、ところがモーツァルトのすごいところですね。

海老澤 モーツァルトは、研究者ばかりでなくて、聴き手にも弾き手にも謎ですね。その謎がまた我々を惹きつけてくれているわけです。

これは日本にいと難しいですけど、自筆譜や版の研究を若い演奏家もうちよつと考えてやつていただきたいと思うんです。

研究者は、自分で音にできません。作曲家は記号として楽譜、音符で残さざるをえない。それを音にする演奏家が、モーツァルトの心、精神に迫ることを響きでやつてほしいと思うんです。それをアシストするのが研究者です。私はそれをずつと課題としてきたんですけど、なかなかうまくいきません。

河合 それは相手が相手ですから。それだけに限りがないからいいですね。終わることは絶対ないわけで。

海老澤 そうですね。本当にモーツァルトの世界の端っこをちよつとほじくつたような感じですから。

河合 モーツァルトをそれだけずうつとやつておられたら、こういう質問はでき

ないかもしれないけど、その中でも「これが好き」というのは、どういうのを挙げられるんですか。

海老澤 先生、そういう質問は私にとつてはいちばん難しいんです(笑)。

洋楽と瀧廉太郎

河合 このごろ、韓国、中国もがんばりだしたけど、洋楽の受入れでは日本は、演奏でも、研究でもすごいんじゃないですか。

海老澤 明治の初めに学制ができ、その後、伊沢修二がボストンに勉強に行つて、明治二二年に音楽取調係を文部省につくりました。取調係というのは、警察みたいですけど音楽研究所という意味です。その後、明治二〇年に東京音楽学校、専門的な教育機関ができて、そのころから受入れの努力をいちはんしたのには日本でした。

明治維新は日本にとつて不幸な面もあつたんじゃないですか。日本は西洋に傾き過ぎたというくらいがあつて、今は本当の意味で音楽の多様性を踏まえた音

楽実践や、教育・研究も、もつとあつていいと思つているんです。例えば邦楽を重視しなければいけない。音楽を大事にするには、音楽が音楽として成り立つようなシステムを考えなきゃいけない。

河合 そうですね。

先生はモーツァルトだけでなく、瀧廉太郎についても本を出しておられますね。海老澤 私が瀧廉太郎になぜ興味をもつ



の響きはないですか。海老澤 ないです。子どものときから熟してからです。

河合 そうそう。

海老澤 『荒城の月』も、山田耕筰がいじり過ぎて、本来の瀧廉太郎の響きを、大正ロマンの響きにしちゃつた、伴奏をつけて(笑)。瀧廉太郎のは中学唱歌です。斉唱で、非常に単純で、テンポも早くてすつきりしている。その響きはやっぱり天折の響きに通じている。でも、彼はそんなことを思つていなかった。ライプツヒに留学して、風邪をひいて結核になつて、志半ばじゃなくて、初めにしてもう帰つてきてしまった。

彼はピアノ曲を二つしか書いてないのですが、帰ってきてから日本で仕上げたのが、『憾み』という曲です。「うらみ」も人を恨むんじゃないかと、「遺憾」の「憾」の字です。悔しい。それがもろに出てるのがありましてね。

河合 はあ、すごいですね。

海老澤 帰ってきて、もう自分はだめだと思っただけです。自分のためのレクイエムみたいなものですね。最後の時期の三つの歌曲もすてきです。やっぱり自分の運命を見据えて、書いて死んでいく。最初に西洋の技術を獲得して、それによって日本人の世界を描いた。三八曲ぐらいは残ってませんが、これは大変な人です。

河合 それは演奏されることがあるんですか。

海老澤 あんまりありません。瀧廉太郎は『荒城の月』と『花』くらいしか知られておりません。瀧廉太郎が長生きをしたら、日本の西洋的な音楽は変わったと思います。

河合 そうでしょうね。

うんです。

河合 そうそう。しかし、けっこうではだめで、そこを越えないとね。

海老澤 言葉をきちんと理解して歌うことができていない。それが解決されれば、日本のとらえ方や見方で、外国に発信ができるんじゃないかと思ってるんです。

河合 そうですね。日本から何かというときに、ヨーロッパの人と違って日本的だというのがわかりやすいんだけど、そうじゃなくて、日本人がやってしかも国

海老澤 瀧廉太郎も三年前に没後一〇〇年を迎えましたので、見直す必要があると思っっています。明治の日本の新しい音楽文化の形成について、もう一回いろいろな点で、演奏家も、作曲家も、研究者も考えるべきです。

河合 おっしゃっているように、そういう曲を演奏して、みんなに聴かせてみることもやるべきですね。そうすると今の我々がいったい何をしたらいいかにつなげていきますよ。

海老澤 中江兆民のルソーもそうですけど、日本人の西洋思想、西洋音楽、芸術を日本的に重用するすがすがさが、明治に端的にあらわれてるんじゃないかと思うんです。

河合 明治のあのころは何かにつけて、やっぱりすごいですよ。あそこでパッと上がりすぎたから、あと情性で落ちるんですね。

日本の西洋音楽を発信するには

河合 これから日本が音楽に関していろ

いろ発信していくため、人材養成が大切といわれていますが、実際にはどうですか。

海老澤 音楽ですと言葉が要らないので、技術だけである意味では説得力があるわけですね。

私は、若いオペラ歌手を養成する新国立劇場のオペラ研修所長を八年やっています。今でもいちばん重視しているのは、イタリア語とドイツ語の勉強です。歌手は、英語はコミュニケーションの手段として重要ですけど、イタリア語、ドイツ語、フランス語の順序で、自分のものにしなきゃいけない。

河合 そうそう。

海老澤 それがまだ欠けてます。私もかつて学長として大学院の音楽の学生なども教えましたけど、やっぱり大学の教育がだめです。

河合 だめですというのには、どういうところがなんですか。

海老澤 音楽家は、イタリア歌曲ならイタリア語、ドイツ歌曲ならドイツ語をわからずに歌っていても、けっこうできちゃ

がちですからね。

河合 日本はほかの芸術でもみんなそういう傾向があって、日本だけで食べて、日本だけで固まっているでしょう。一人を出ていくと、かえって嫌われる。難しいですね。こういう問題を破っていくことを、もっと考えないけませんね。破るためには、文化庁も何か工夫せないとかなと思います。

今日はどうもありがとうございました。(了)

文化庁の主催する文化芸術懇談会で長崎県

に行った際に、長崎歴史文化博物館を見学した。建築家・黒川紀章氏の設計になるものだが、そこに江戸時代の長崎奉行所が復元されている。現代建築と江戸時代の建築物が共存する興味深い建物だが、そのときに印象に残ったことを一つ。

奉行所での取調べの様子を過去の判決記録(犯科帳)に基づきながら、ボランティアがお芝居して上演する。これが実に好評で非常にた

ボランティア芝居

文化庁の抜穴 河合隼雄

くさんの観客が来る。観客をうまく参加させるようなシナリオもあって、ますます大評判のことである。

このようなボランティア活動は、前々からどこかでやってほしいと私が願っていたことである。日本の歴史を、古い遺物だけで知るのはなく、生きた人間の姿をとらえて感じることは本当に興味深いと思う。こういうところに興味深い文化ボランティアの活動があり、全国でそれぞれ工夫してやっていただきたいと思う。